

4. 郡名墨書土器をめぐって

稻荷前遺跡から出土した墨書土器のなかで特に注目すべきものが2点ある。何れも第1号井戸跡から検出されたもので、墨書土器としても現在まで県内最古の資料と考えられる。また書かれている内容も通常の墨書土器とは明らかに異なる点が認められる他、土器そのものに関しても極めて特徴ある点が見られるのである。最後にこれら2点の墨書土器についてその特徴と問題点をまとめて本稿を閉じることとしたい。

2点の墨書土器は第1号井戸最下層から出土した。井戸そのものは深さ1.75mとさほど深くない。1点は須恵器蓋である(第175図18)。この土器は推定径17.4cmで鉢及び天井部の約3/5を欠いている。焼成はやや甘く灰色を呈する。胎土に所謂白色針状物質を含むことから南比企窯跡群の製品であることは疑いない。形態を見ると全体に低平で分厚い作りで、平坦な天井部の中位以上を回転ヘラ削り調整されている。また折り返し部はやや外方に短く屈折する。墨書は天井部外面のほぼ全^(大カ)面にわたって記されている。内容は「□里郡」、「□尺本」、「多磨郡男川」、「□□□」と判読される。□里郡は土器周縁部から中心に向かって書かれ、文意から大里郡と読める。多磨郡男川は鉢を巡るように逆時計回りに記されている。大里郡、多磨郡は武藏国の郡名を表わし、「郡」という表記方法から大宝令(701年)以降であることは間違いないものと思われる。尺本の上の一字が判読できないが、尺本は「坂本」と読め、地名と人名の両方の可能性をもつが、他の文字が何れも地名を表わしていることから地名の可能性がより高いといえようか。若し、地名とすると武藏国の郡あるいは郷名の中には該当するものがない。最後の□□郡は残画から見ると多磨郡の可能性が高いものと判断したが断定はできない。もし多磨郡だとすれば習書とするのが最も妥当な解釈となろう。多磨郡には小川、川口、小楊、小野、新田、小島、海田、石津、狹江、勢多の各郷が存在したとされている(和名類聚抄高山寺本)。多磨郡に続く「男川」は音の一致から小川郷を指すと見るのが自然であろう。小川郷は元々は男川であったのかもしれない。

この蓋の内面には「内」の押印が刻されている。鳩山窯跡群からも「内」の押印が押された土器が少數ではあるが出土しており(渡辺1990)、蓋の器形や印形から見て広町15号窯の製品であることがほぼ確実視してきた。ただ広町15号窯からは蓋に押印を押した例は検出されていないようだ。「内」の押印をもつ須恵器は鳩山I期~II期に限定され、この蓋もその範疇にあるが、この蓋は分厚い作りから見て鳩山I期(本遺跡第VI期)に属するものと推定される。実年代は渡辺氏によって8世紀第1四半期後半と考えられている。墨書のかかれた時期と土器の年代は必ずしも一致する訳ではないが、井戸の機能した年代は長く見積もっても8世紀第2四半期までであったと考えられ、土器の使用から廃棄に至る年代幅を加味すると、墨書が記された年代と土器の生産年代とは大きなタイムラグは存在しなかったものと推定される。もう一つ重要な点はこの「内」の押印をもつ土器の供給先である。渡辺氏は郡衙或いは国衙を想定している(渡辺前掲書)が、墨書の記載内容から見て妥当な解釈である。「内」の押印をもつ土器そのものの発見例は生産地以外とすると本例が唯一と思われる。8世紀第1四半期頃は郡の設置が進んだ時期にあたり、墨書土器そのものが集落から出土する例は殆どない。こうした意味でなぜ本遺跡から該期の墨書土器、それも郡名を記したものが出土地するの

か大きな謎である。いや、郡衙といわれる遺跡でも複数の郡名を記した墨書土器が発見されたという例は寡聞にして知らない。本遺跡VI期の集落を概観しても官衙的な色彩は全く認められないものである。こうした土器の年代限定が正しければ逆に大里郡、多磨郡が8世紀第1四半期から遅くとも第2四半期には建郡されていた資料ともなろうし、郷里制との絡みで言うと「多磨郡男川」の下に続く文字があったとすればそれは「郷」であった可能性がより高いことにもなろう。

もう1点の墨書土器は須恵器坏でやはり南比企産である。口縁部を欠くが口径15cm前後となろう。底部はヘラ削り調整され、中央部に糸切り痕を残す。形態から鳩山I期に比定しても大きな過誤はなかろう。底部に欠損があり墨書も切れているが、中央部に小さく記され、古い段階の墨書土器の特徴を備えている(平川1988)。字は「的」または「多」とも思えるが、判然としない。字の判読は取りあえず保留したい。土器の時期としても前記の蓋と齟齬はなく両者はほぼ同時期に書かれた墨書とすることができる。

おそらく「内」の刻印をもつ特徴や本遺跡の性格から見てこの2点の墨書土器は稻荷前遺跡で書かれた可能性は少ない。やはり国衙乃至郡衙において習書されたとするのが今のところ精一杯の解釈であろう。国衙はともかく、南比企産須恵器が供給された郡衙は武蔵国全てではない筈で将来的に郡衙本体が調査されればもっと限定されてくるであろう。郡衙は以外に近いかもしれない。入間郡衙の発見に期待を寄せつつ擱筆したい。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸』歴史時代編II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 飯田充晴 1982 『東の上遺跡第7・8次調査』所沢市文化財調査報告書第8集 所沢市教育委員会
- 飯田充晴 1984 『柳瀬川流域遺跡群(II)』所沢市文化財調査報告書第11集 所沢市教育委員会
- 飯塚武司 1988 「No.362・363遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和61年度』 東京都埋蔵文化財調査報告 第9集 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 石井克己 1990 「黒井峯遺跡」『古墳時代の研究』2 集落と豪族居館 雄山閣
- 石川久明 1986 『越生五領・南原』越生町埋蔵文化財調査報告書第4集 越生町教育委員会
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸』古墳・歴史時代編I 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上尚明 1989 「古代集落遺跡の再検討－郡衙・郷家・一般集落」『研究紀要』第5号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上 肇 1979 「7世紀の坏形土器について～南比企地方を中心として～」『埼玉県立博物館紀要』第6号 埼玉県立博物館
- 伊藤研志 1981 『勝呂廃寺』坂戸市勝呂廃寺跡範囲確認調査概報 坂戸市教育委員会
- 今井 宏 1980 『児沢・立野・大塚原』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会
- 加藤恭朗他1987 『古代の坂戸－坂戸市遺跡発掘調査概報I－』 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他1988 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第I集』 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他1989 『若葉台遺跡－若葉台遺跡発掘調査報告書I－』 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗他1990 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第II集』 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他1991 『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第III集』 坂戸市教育委員会
- 金井塚厚志1989 『境田遺跡』 鳩山町埋蔵文化財調査報告 第5集 鳩山町教育委員会